天橋立・景観まちづくり通信

平成１９年３月発行
Vol.11

～天橋立を核とした魅力ある景観まちづくりに向けて～

第 2回　天橋立周辺景観まちづくり･学習会を開催しました。

出石の観光カリスマにまちづくりを学びました

天橋立周辺の景観形成の検討を進めるに当たって、景観まちづくりに対する理解を深めるとともに、先進事例等を学ぶための第2回景観まちづくり学習会を開催しました。

今回は、国土交通省の観光カリスマにも選定された(株)出石まちづくり公社取締役の上坂卓夫氏を講師として迎えて「住民主体のまちなみ保存運動～出石の観光振興と景観づくりに学ぶ～」と題し、講演いただくとともに参加者との意見交換を行いました。

日　時：平成１９年２月１６日（金）
場　所：宮津市保険センター大会議室
参加人数：約６０名

⇒詳細はこちら　http://www.pref.kyoto.jp/hashidate-model/

◆ 住民主体のまちなみ保存運動～出石の観光振興と景観づくりに学ぶ～」基調講演概要

宮津は観光も歴史も立派

出石に比べて宮津は観光も歴史的なものもはるかに立派で、私たちがまちづくりに一生懸命になったのも、こちらに刺激されたからである。宮津には宝物がいっぱいある。

まちづくりを始めたきっかけ

鉄道が出石を通らなかったため、但馬の中心だった出石がさびれ、このままではいけないと思った。

城崎温泉から天橋立に向かう観光バスに出石に立ち寄ってもらうため、出石城の復元を計画し、全国的にはコンクリート造で建造されていたが、出石では町民の寄付で隅櫓二つを木造と漆喰でつくった。

出石そばの成功で観光客が増加

昭和４０年台にはわずか 3 軒が冬だけ営業していた出石そばを、観光協会と行政と業者とで全国的に宣伝したら大成功。そば屋が増えると共に観光客入込み数も増加。現在はそば屋約５０件、観光客は８５万人。

観光」から 出石の魅力に着目したまちづくり」へ

昭和 58 年に草柳大蔵を塾長とした静思塾という勉強会をスタート。130～150 人が参加したが、その勉強会で、建築家・宮脇檀氏らから「出石はこのままではだめなまちになってしまう、観光だけではなく、出石がもっている魅力に目を向けろ」と教わった。

昭和 61 年に出石まちづくり内町都市核形成計画を策定。兵庫県から都市景観形成地区の指定を受け、この補助により出石のまちづくりは進展した。

昭和 63 年 10 月には住民だけのまちづくりの団体「出石城下町を活かす会」を発足。行政から補助金をもらわずに自分たちの会費で運営して、何かをやろうとするときには行政なりいろいろな人たちの力を借りる。行政と専門家と住民と三者一体となったまちづくりである「活かせ町並み、創ろう景観」を合い言葉に、美しい自然と歴史遺産に恵まれた出石町の明日へのまちづくりについて考え、提言し、行動するまちづくり団体である。

出石のシンボル辰鼓楼とそば屋

修景事例（郵便局）

まちづくり公社の設立といずし未来委員会の立ちあげ

第３セクターの株式会社である出石まちづくり公社を設立した。これまでは物販販売などが主な収入源だったが、将来的には民間に譲り、公社は民間ができないことをやっていく。

去年、「いずし未来委員会」を立ちあげた。まちづくり公社を中心に、商工会、観光協会、農業団体、婦人団体など４０人の委員で、もっと頑張ってやらないといけないことを模索している。

出石まちづくり公社

今後の宮津のまちづくりについて

宮津では昔の花街の雰囲気を残していこうという計画があると聞いたが、今後の課題として大事なことだと思う。自分たちのまちの素晴しいところをまず知ってもらう。このまちをどうしたらいいかを真剣に考え実行することがいちばん大事だと思っている。

貸店舗（まちづくり公社運営）

◆意見交換での主なやりとり

Q　観光地としてあまり知られていないところで、自分たちが金を出しあって本物の隅櫓をつくろうと思ったきっかけは何か。

A　出石のまちのシンボルだった城が明治の廃城令で取り壊され、但馬の中心だった出石の勢いが大正の頃から落ちていった。何をしたらいいか模索する中で城の復元が叫ばれるようになった。これを起爆剤に一人でも多くの人に出石を知ってもらい、観光客を集めたいと思った。

出石のまちなみ

Q　昭和60年頃から景観形成地区指定、旧城下町再生計画策定、そしてHOPE計画は全国的に有名で、みんなが出石に見学に行った。宮脇檀氏、水谷頴介氏などの専門家を地元の方がうまく使ったという感じがする。

A　彼らがうまく国とつないでくれた。HOPE計画は、建築家・小林郁雄氏が応募を勧めてくれた。機会があるたびにそういう人たちが出石を引っ張り出してくれた。

保存・活用を検討されている酒蔵

Q　町並みを活かすことに対して住民の理解は変わってきたか。

A　町並み保存を観光中心でしていた頃は一般の人たちは白い目で見ていたが、いつ頃からか理解してもらえるようになった。一度外に出た人たちから出石はいいまちだといってもらう、その積み重ねで住民が自分のまちに誇りをもつようになった。
まちやデザインマニュアルをつくって、まず建設に関わる人たちに知ってもらい、そういう専門家が説明すると一般の人もわかりやすい。

Q　宮津のまちづくりに対してアドバイスをいただきたい。

A　宮津には素晴しい財産があって羨ましい。海と天橋立と山の素晴しい風景、そこで活躍した俳人や文人たちの足跡をたどるだけでもすごいストックがあると思う。花街の風情が残っているので、うまく活用してはどうか。いい町並みを残そうと思ったら、気がついたときから手を付けていけばいい。そのまちに根づいたすごいものがあれば、まちの宝として残していくべき。

宮津市文珠地区において京都造形芸術大学との連携によるまちづくりの検討が進められています。

文珠地区において京都造形大学との連携によるまちづくりの検討を進めていくことになりました。

天橋立周辺景観まちづくり検討会の座長を務める京都造形芸術大学の前田教授と文珠まちづくり協議会が協定を結んだもので、今後２年間をかけ学生が現地調査等を行い、景観などを重視したまちづくりを検討していくものです。

編集・発行

【事務局】■京都府 土木建築部 都市計画課　電話：075-414-5327（直）
■ 京都府 丹後土木事務所 企画調整室　電話：0772-22-2143（直）